ISSN 2186-0645

富山市埋蔵文化財調査報告78

千石町（せんごくまち）遺跡発掘調査報告書

― 千石町四丁目地内宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査 ―

2015

富 山 市 教 育 委 員 会

ISSN 2186-0645

富山市埋蔵文化財調査報告78

千石町（せんごくまち）遺跡発掘調査報告書

— 千石町四丁目地内宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査 —

2015

富 山 市 教 育 委 員 会

例　　言

1　本書は千石町四丁目地内宅地造成に伴う千石町遺跡の発掘調査報告書である。
2　本調査はパナホーム株式会社北陸支社（支社長　渡邊憲彦）の発注を受け、富山市教育委員会埋蔵文化財センターの監理のもと、株式会社エイ・テックが実施した。
3　調査の概要は以下の通りである。
・遺 跡 所 在 地　千石町四丁目地内
・調　査　面　積　281.7㎡
・現 地 発 掘 調 査　平成27年３月４日～同年４月３日
・整　理　調　査　平成27年３月４日～同年９月30日
監 理 担 当 者　近藤顕子（富山市教育委員会埋蔵文化財センター専門学芸員）
現地調査担当者　岡田一広、桶谷　潤（株式会社エイ・テック）
整理作業担当者　岡田一広（株式会社エイ・テック）
4　発掘調査及び整理調査において、次の各氏より御指導・御協力を賜った。記して謝意を表します（順不同・敬称略）。
浦畑奈津子、下濱貴子、高橋浩二、藤田富士夫、宮田　明、富山市郷土博物館、富山市立図書館
5　本書の執筆は第Ⅰ・Ⅱ章を近藤、それ以外を岡田が行った。各々の文責は文末に記した。全体の編集は近藤・岡田が担当した。
6　古地図の掲載については富山県立図書館の承認を得た。
7　出土遺物・原図・写真類は富山市教育委員会が保管している。

凡　　例

1　本書で用いた座標は世界測地系第Ⅶ系である。挿図の方位は座標北、水平基準は海抜高である。
2　遺構表記は以下の記号を用いた。
ＳＫ；土坑、ＳＤ；溝、ＳＰ；ピット、ＳＺ；方形周溝墓
3　土壌名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』（2003年版）に準拠している。
4　遺構実測図中の塗り表現は以下の通りである。
地山
5　遺物実測図中の塗り表現は以下の通りである。
〔土器類〕　焦げ目・油煙　　赤彩

目　　次

第Ⅰ章　調査の経過 …… 1
第１節　調査に至る経過 …… 1
第２節　発掘調査と整理作業の経過 …… 1

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 2
第１節　地理的環境 …… 2
第２節　歴史的環境 …… 2

第Ⅲ章　調査の概要 …… 4
第１節　発掘調査の方法 …… 4
第２節　基本層序 …… 4
第３節　遺構 …… 5
第４節　遺物 …… 9

第Ⅳ章　総括 …… 18

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　調査に至る経過

千石町遺跡（市№2010444）は、平成5年3月富山市教育委員会（以下市教委）発行『富山市遺跡地図』に「中世富山城推定地」（市№201398）として搭載され、周知の埋蔵文化財包蔵地となった。中世富山城の築城年代は天文12（1543）年頃とされ、その位置については『富山之記』〔山田孝雄本〕により星井町以西に所在したとする説と現在の富山城の位置とする２説があったため、千石町と星井町一帯を「中世富山城推定地」としていた。

近年の調査で、城址公園内の富山城跡の本丸付近から16世紀前半の堀などの戦国期の遺構や中世期の遺物が見つかり、近世富山城の下層に中世富山城が所在することがほぼ確定された〔富山市教委2004〕。一方、千石町地内では、平成23年に千石町4丁目で実施した試掘調査により、近世期の城下町遺構の下層から室町時代の集落跡を確認したが城館遺構の所在は認められず、近年複数実施した試掘調査成果を反映し、名称を平成25年３月に「中世富山城推定地」から「千石町遺跡」と変更した。

平成25年８月に大仁酒造㈱破産管財人より、「酒のだいじん」跡地である富山市千石町４丁目3-7外について、市教委に埋蔵文化財の所在確認依頼が提出された。将来において宅地造成を予定しているため、破産管財人と２者で協議を行った。その結果、まず駐車場部分の試掘調査を先行して実施し、店舗建物が残っていたため、解体後建物部分の試掘を行うこととした。協議を受けて８月７日付けで文化財保護法93条第１項に基づく埋蔵文化財発掘の届出が市教委に提出された。

試掘調査は平成25年９月６日に駐車場部分、平成26年10月21・23日に店舗部分の合計2119.95㎡対象に実施し、860㎡に遺跡の所在を確認した。

平成26年12月に工事主体者がパナホーム㈱北陸支社となることが決定したため、パナホーム㈱北陸支社及び設計者の㈲アーバンプランニングと協議を行い、宅地造成予定地のうち、宅地部分は50cm以上の盛土で遺跡を保存し、道路部分は記録保存のための発掘調査を行うこととした。発掘調査は工事主体者が民間発掘調査会社へ委託し、工事主体者からの依頼を受けた埋蔵文化財センターの監理のもと、平成27年２月から実施することとした。

文化財保護法99条第１項に基づく埋蔵文化財発掘調査の報告は、同３月４日付けで市教委から富山県教育委員会へ提出した。

第１図　調査区位置図（S＝１／2,000）

第２節　発掘調査と整理作業の経過

発掘調査はパナホーム㈱北陸支社から発注され、整理調査期間も含め同年２月20日から９月31日を業務期間として㈱エイ・テックが受託した。２月20日に市教委、パナホーム㈱北陸支社、㈱エイ・テックの三者で協定を結び、調査に着手した。

発掘調査は平成27年３月４日から同年４月１日まで行った。表土排土はバックホウを用いて３月４日から６日まで行った。排土は調査区外の敷地内に横

置きした。表土排土完了後、引き続き人力による包含層掘削・遺構検出作業を27日まで実施した。

試掘調査では江戸時代の遺構面、弥生時代の遺物包含層・遺構面がほぼ同一の深さに所在することが確認されており、調査区全体から当該期の遺構が確認され、遺物が出土した。包含層の遺物はグリッドを設定してグリッド毎に取り上げた。遺構検出後、遺構掘削作業を行い、掘削と並行して随時写真撮影・測量・図面作成作業を行った。４月１日に現地調査を終了し、同月６日付けで現地を引渡した。（近藤）

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

千石町遺跡は、富山市域市街地の千石町から星井町にまたがる埋蔵文化財包蔵地である。富山湾から８㎞内陸に入った神通川右岸の富山市中心部に位置する。神通川の堆積によって形成された緩扇状地の氾濫平野上に立地し、現在は平坦地であるが、神通川と支流の旧河道による窪地が確認されている。

旧神通川本流は、江戸時代以前には現在の富山城跡北側を流れる松川や呉羽丘陵東麓を流れる井田川であったと考えられ、富山城西側から北側へ蛇行し東方向へ流れていた。明治34～36年に河川の流れを直線的に変える馳越工事が行われ、旧河道は規模を縮小して現在の松川となった。

一方、富山城下町の南に所在する四ッ谷川は富山市太郎丸付近でいたち川本流から分岐し、富山市星井町付近で西に折れ松川に合流する。四ッ谷川は『万治年間富山旧市街図』には惣構として土塁とともに描かれ、城下町の南の防御線であったが、江戸時代前期以前は星井町付近から西に折れず、北方向へ流れていたことが推測されていた〔國香1995〕。平成18年度及び平成20～21年度の市内電車環状化に伴う調査により、一番町交差点の東側で南北方向の幅20ｍの河川跡が埋められた遺構が確認され、これを裏付けた。現在の国道41号線の東側に沿うように川筋があったと考えられる。

今回の調査地は遺跡の西中部、千石町４丁目に位置し、現状は宅地である。標高は11.2ｍでほぼ平坦である。

第２図　埋没樹木の出土地と旧地形復元
（S＝１／2,500）

第２節　歴史的環境

富山市中心部は市街地化により、江戸時代以前の様相は近年まではっきりとしていなかった。近年の中心市街地再開発事業等や宅地開発による試掘調査成果により、江戸時代以前の様相が明らかになりつつある。

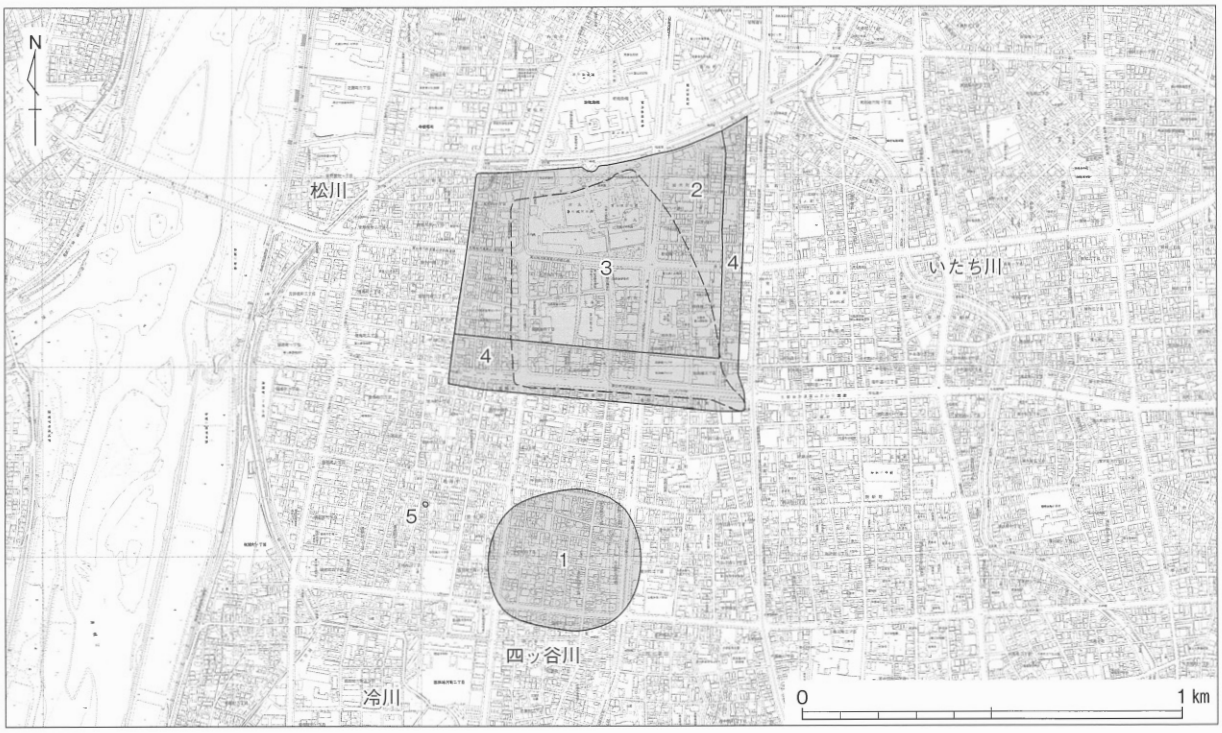
縄文時代　平成23年の調査では富山城外堀肩部の検出面から立ち木株を確認した。樹種はハンノキ

属で放射性炭素年代測定年代は約4,800年前の縄文中期であった。同時点で実施した自然科学分析結果から富山城の地盤は縄文中期以前から河川氾濫による自然堆積が繰り返された湿地帯であることが分かった〔富山市教委2012〕。また、富山城西ノ丸で縄文晩期の縄文土器が表採されている〔林寺1992〕。

弥生～古墳時代　千石町遺跡では、平成26年５月、今回の調査区から南西へ100ｍの位置の千石町４丁目の老人福祉施設建築工事に先立つ地質調査で、地下約６ｍから埋没樹木６本が発見された。樹木はコナラ属２本・クリ４本の自然木で、コナラ属の放射性炭素年代測定年代は約2,300年前の弥生中期であった。これらの樹木には砂や礫が付着しており、洪水で流されてきた倒木と考えられ、根が比較的良好に残ることから、それほど離れていない位置に生育していたと推定された。 周辺における試掘調査の結果を合わせ、当該地は、2,300年前の河川洪水で深い窪地となった流路跡であり、流路は南西から北東方向であることから、神通川からの水流と推定される。周辺の試掘調査結果から、この地点の北側から今回の調査地にかけては、比較的安定した高台となっていることが分かった〔富山市教委2015〕。

古代　富山城・城下町の下層の総曲輪遺跡では、平成22年富山城西ノ丸で、「宅持」と墨書された奈良時代後期の須恵器が出土した〔鹿島2011〕。平成25年西町南地区市街地再開発事業地内でも９世紀後半の土師器・須恵器が出土し〔富山市教委2014〕、古代の集落や官衙関連遺跡の所在が推定される。

中世～近世　千石町遺跡では、今回の調査区及び周辺の試掘調査で、鎌倉～室町時代の遺構・遺物が確認された。近世に入ると、洪水堆積層の上に城下町が作られた。今回の調査区は富山城下町の南端にあたり、試掘調査では江戸期の水田耕作層が確認されることから一部は水田として利用されたと考えられる。　（近藤）



第３図　千石町遺跡と周辺の遺跡（１／20,000）

１．千石町遺跡　２．富山城跡　３．総曲輪遺跡（破線）　４．富山城下町遺跡主要部　５．相生町遺跡

第Ⅲ章　調査の概要

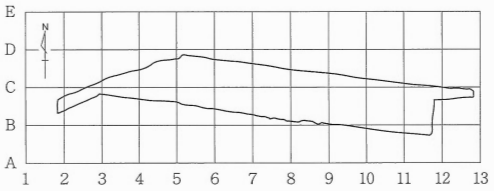
第１節　発掘調査の方法

グリッド杭は世界測地系（2011）を元に設定し、座標系は世界測地系で平面直角座標系第Ⅶ系（原点は北緯36° 00′ 00″，東経137° 10′ 00″）に合わせた。グリッドは５ｍ間隔で南西側を基準とし、南北軸をアルファベット、東西軸を数字で表し、その交点で表記した。Ａ１の座標はＸ＝76,005、Ｙ＝3,770である。方位は座標北、水平水準は東京湾平均海面の海抜高である。

遺構検出は現代の造成により複雑化しており手間取った。遺構検出終了後遺構掘削を順次実施した。撮影足場による撮影を３月31日に実施し、その後ラジコンヘリコプターによる空撮を実施した。

写真撮影は現地調査ではブローニー判（カラーリバーサルフィルム・白黒フィルム）、35㎜判フィルムカメラ（白黒フィルム）、デジタルカメラは35㎜フルサイズ（有効画素数3,630万画素）およびAPS-Cサイズ（有効画素数1,800万画素）の一眼レフデジタルカメラを使用した。遺物写真はデジタルパック式一眼レフカメラ（有効画素数2,130万画素）で撮影を実施した。

整理調査は現地発掘調査と同時に遺物洗浄、注記および各種台帳等作成を実施した。遺物は手実測し、報告書作成はAdobe® Criative Suite®でデジタルトレース・デジタル写真現像・レイアウト等を実施し印刷所にはPDF型式（X-1a;2001）で印刷所へ入稿し、平成27年９月30日に刊行した。



第４図　グリッド配置図（Ｓ＝１／1,000）

第２節　基本層序

当調査区は、標高約11.2ｍの沖積平野上に立地する。周辺微地形からは、標高10.0ｍの境が調査区南側のあざみ通り－西側のすずかけ通り－北側の花水木通りとコの字状に廻り、当調査区がやや高くなる。西側は神通川の氾濫原で、当調査区南北にある東西方向は窪地は河道と推測できることが、試掘調査の結果からも裏付けできた〔第Ⅱ章参照〕。

基本層序は以下の通りである。

第Ⅰ層；近現代造成層

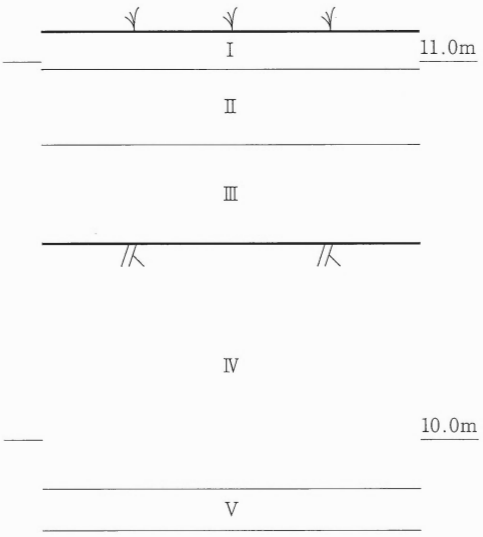
第Ⅱ層；江戸時代整地層　灰黄褐色細粒砂質シルト。
（Hue10YR4/2）

第Ⅲ層；弥生～中世遺物包含層　黒褐色シルト質細粒砂。
（Hue10YR2/3）

第Ⅳ層；地山　黄褐色細粒砂質シルト。
（Hue10YR5/8）

第Ⅴ層；地山　明黄褐色シルト質粘土。
（Hue10YR6/6）

遺構検出面はいずれの時代も第Ⅳ層上面である。



第５図　基本層序模式図（Ｓ＝１／20）

第３節　遺構

１．中世以降の遺構

（１）土坑

ＳＫ01　調査区の中央部、グリッド（Ｂ５・Ｂ６）区で検出した。平面形は長方形で南側は調査区外に延びる。ＳＤ01より古く、ＳＤ05より新しい。規模は、長軸1.84m以上、短軸1.74m、深さ0.37mを測る。出土遺物は、弥生土器、土師器、珠洲、越中瀬戸、鉄釘である。

ＳＫ02　調査区の中央部、グリッド（Ｂ６）区で検出した。平面形は楕円形である。規模は、長軸1.18m、短軸1.02m、深さ0.23mを測る。出土遺物は、弥生土器、越中瀬戸、伊万里、九谷、炻器、七厘である。

ＳＫ03　調査区の中央部、グリッド（Ｂ６・Ｂ７）区で検出した。平面形は長方形で南側は調査区外に延びる。規模は、長軸1.34m以上、短軸2.90m、深さ0.34mを測る。出土遺物は、珠洲、越中瀬戸、唐津、伊万里、京焼である。

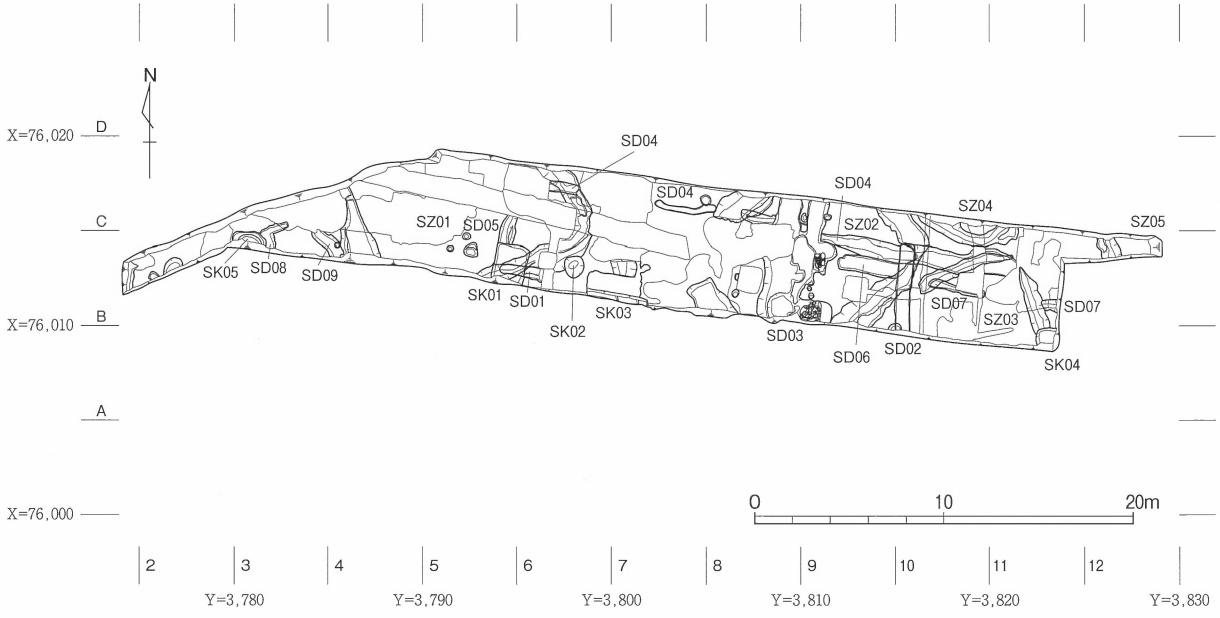
ＳＫ04　調査区の東側、グリッド（A11）区で検出した。平面形は方形で東側と南側は調査区外に延びる。規模は、長軸1.00m以上、短軸1.00m以上、深さ0.23mを測る。内部には唐津の甕が据えてあり、トイレ遺構の可能性がある。出土遺物は、唐津である。

（２）溝

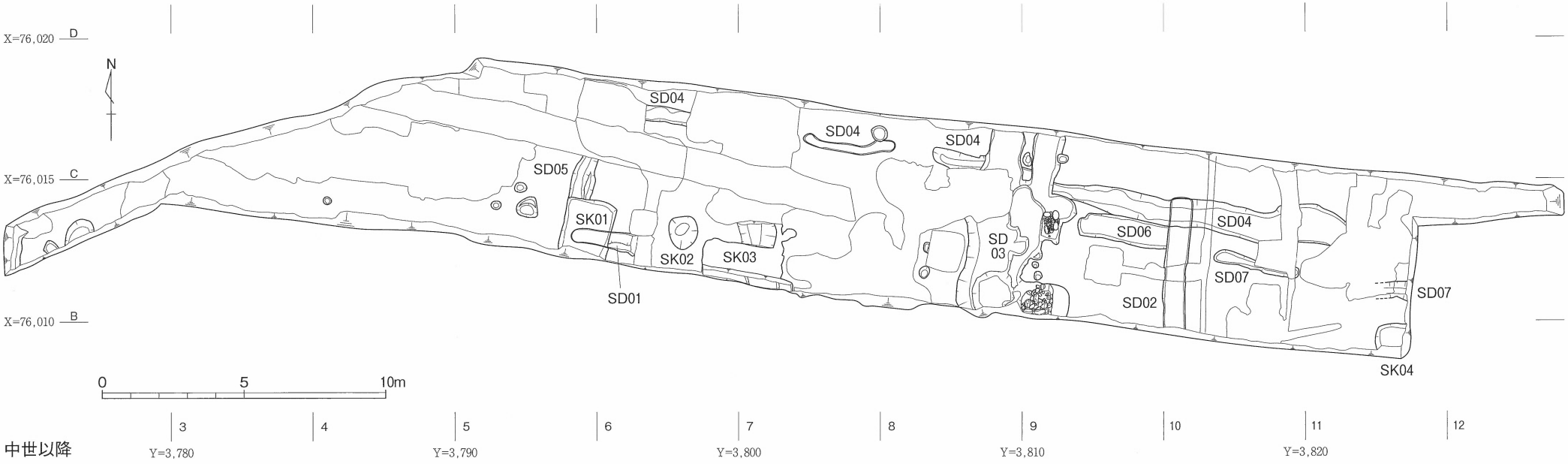
ＳＤ01　調査区の中央部、グリッド（Ｂ５・Ｂ６）区で検出した。ＳＫ01より新しい。東西方向に延びる溝で東側は現代の攪乱で不明である。規模は、長さ2.34m以上、幅0.50m、深さ0.16mを測る。出土遺物は、瀬戸美濃である。

ＳＤ02　調査区の東側、グリッド（Ａ９～10・Ｂ９～10）区で検出した。ＳＤ04・06より新しい。南北方向に延びる溝で南側は調査区外に延びる。規模は、長さ4.56m以上、幅0.80m、深さ0.11mを測る。遺構内部は河原石を主体として埋まる。遺物は出土していない。

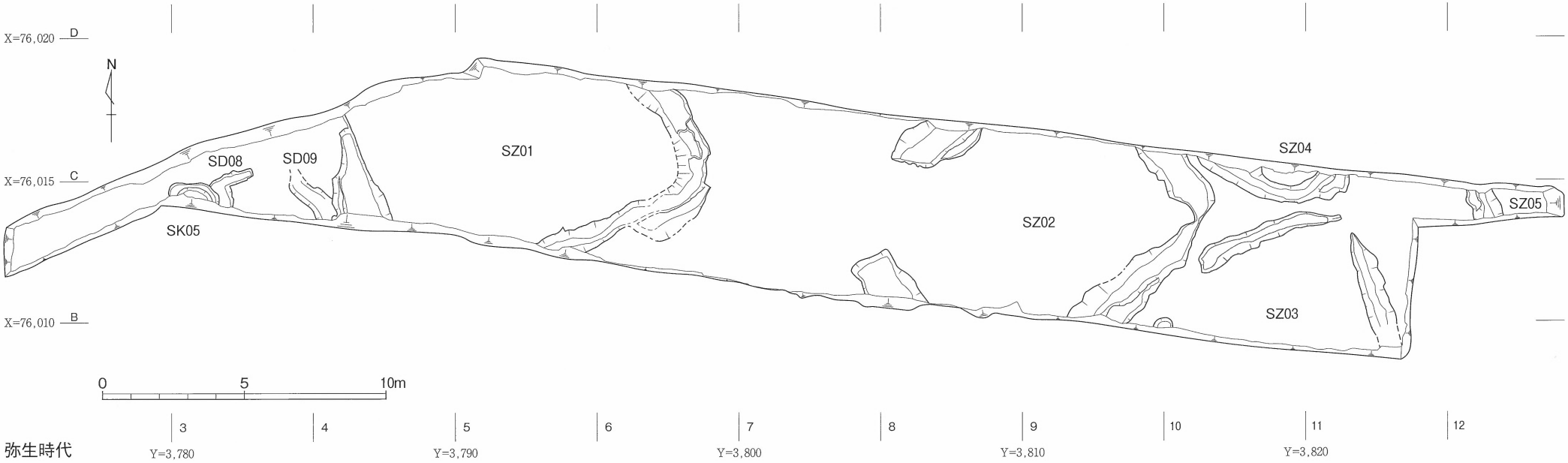
ＳＤ03　調査区の中央部、グリッド（Ｂ８～９・Ｃ８～９）区で検出した。ＳＤ04より新しい。南北方向に走る溝で南側および北側は調査区外に延びる。検出した南半部は水溜め状となり東側には河



第６図　遺構全体図（Ｓ＝１／400）



中世以降



弥生時代

第７図　遺構平面図（S=１／200）

原石を敷き詰めており、水場の可能性がある。また、北側は２又に分流する。規模は、長さ6.40m以上、幅1.04～2.08m、深さ0.34～0.96mを測る。出土遺物は土師器、珠洲、越中瀬戸、唐津、伊万里、瀬戸美濃、京焼、火鉢、土人形である。

ＳＤ04～07　ＳＤ04は調査区の東半部、グリッド（Ｂ９～11・Ｃ６～８）区で検出した。ＳＤ02・03より古い。東西方向に延びる溝で両端は攪乱で残存しない。規模は、長さ25.04m以上、幅1.04m、深さ0.20mを測る。覆土が第Ⅲ層に由来することから中世遺構である。出土遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、珠洲、近世不明陶器、凝灰岩製硯である。また、ＳＤ06・07はＳＤ04と平行に、ＳＤ05はＳＤ04と直交することから、これらの溝は一連の区画溝であると推測する。

２．弥生時代の遺構

（１）方形周溝墓

ＳＺ01（第８図）　調査区の東側、グリッド（Ｂ４～６、Ｃ４～６）区で検出した。上面は削平されており主体部は検出できなかった。主軸はＮ－54°－Ｅで、北隅および南隅は調査区外である。北西隅は周溝が浅くなっており切れる可能性がある。規模は、東西9.60m×南北6.28m以上を測る（周溝内側上端を基準に計測。以下同。）。南側周溝は長さ6.00m以上、幅0.68～1.20m、深さ0.72～0.85mを測る。東側周溝は長さ3.34m以上、幅0.76～1.16m、深さ0.72mを測る。西側周溝は長さ4.00m以上、幅0.46～1.84m、深さ0.40mを測る。出土遺物は縄文土器、弥生土器である。

ＳＺ02（第８図）　調査区の中央部、グリッド（Ｂ７～10、Ｃ７～10）区で検出した。上面は削平されており主体部は検出できなかった。主軸はＮ－72°－Ｅで、北側および南西隅は調査区外である。西隅は周溝が切れる。規模は、北東～南西9.10m×北西～南東7.06mを測る。南東側周溝は長さ4.76m以上、幅0.54～1.88m、深さ0.29～0.69mを測る。北東側周溝は長さ2.60m以上、幅0.29～1.46m、深さ0.47mを測る。北西側周溝は長さ2.00m以上、幅1.70m、深さ0.50mを測る。南西側周溝は長さ2.00m以上、幅1.68m、深さ0.62mを測る。出土遺物は縄文土器、弥生土器である。

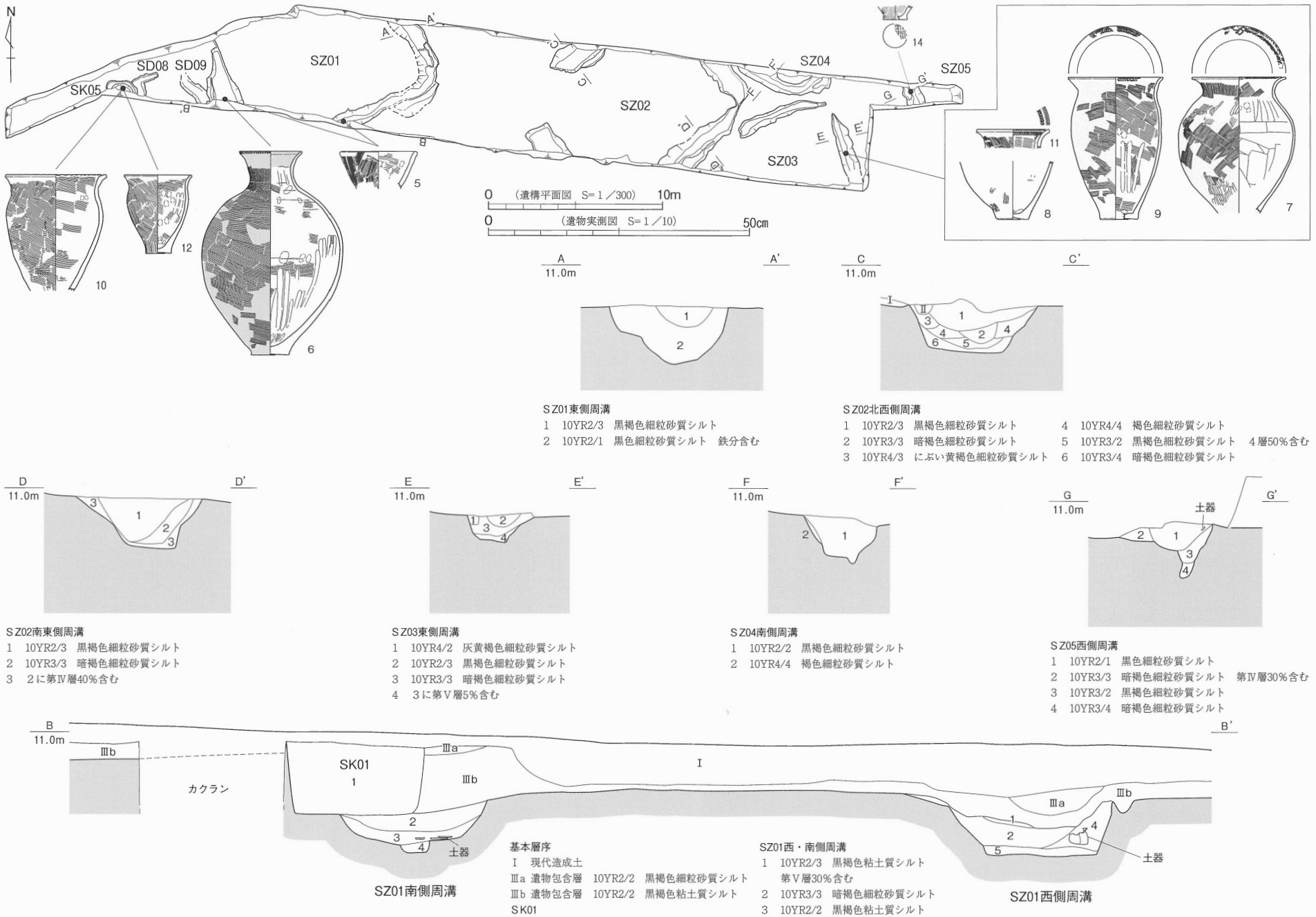
ＳＺ03（第８図）　調査区の東側、グリッド（Ａ９～11、Ｂ９～11）区で検出した。上面は削平されており主体部は検出できなかった。主軸はＮ－70°－Ｅで、南側は調査区外である。北西隅の周溝は切れる。規模は、東西6.74m×南北4.60m以上を測る。北側周溝は長さ4.76m以上、幅0.27～0.88m、深さ0.10～0.34mを測る。東側周溝は長さ3.48m以上、幅0.29～1.46m、深さ0.60mを測る。西側周溝は長さ0.36m以上、幅0.68m、深さ0.26mを測る。出土遺物は弥生土器である。

ＳＺ04（第８図）　調査区の東側、グリッド（Ｂ10～11、Ｃ10～11）区で検出した。上面は削平されており主体部は検出できなかった。主軸はＮ－70°－Ｗで、北側は調査区外である。規模は、東西1.60m以上×南北1.04m以上を測る。南側周溝は長さ2.54m以上、幅0.82m、深さ0.60mを測る。東側周溝は長さ1.36m以上、幅1.20m、深さ0.63mを測る。出土遺物は弥生土器である。

ＳＺ05（第８図）　調査区の東側、グリッド（Ｂ12）区で検出した。上面は削平されており主体部は検出できなかった。位置および溝の幅・深さ等から他の周溝墓と比較し周溝と判断した。位置的には西側周溝と推定する。主軸はＮ－70°－Ｅである。規模は、東西1.60m以上×南北0.90m以上を測る。西側周溝は長さ1.08m以上、幅1.00m、深さ0.57mを測る。出土遺物は弥生土器である。

（２）土坑

ＳＫ05　調査区の西側、グリッド（Ｂ３）区で検出した。平面形は楕円形で南側は調査区外に延びる。ＳＤ08との新旧関係は覆土が共通しており明確にできなかった。規模は、長軸1.80m、短軸0.56m以上、深さ0.63mを測る。出土遺物は、弥生土器である。



SZ01東側周溝
1 10YR2/3 黒褐色細粒砂質シルト
2 10YR2/1 黒色細粒砂質シルト 鉄分含む

SZ02北西側周溝
1 10YR2/3 黒褐色細粒砂質シルト
2 10YR3/3 暗褐色細粒砂質シルト
3 10YR4/3 にぶい黄褐色細粒砂質シルト
4 10YR4/4 褐色細粒砂質シルト
5 10YR3/2 黒褐色細粒砂質シルト 4層50%含む
6 10YR3/4 暗褐色細粒砂質シルト

SZ02南東側周溝
1 10YR2/3 黒褐色細粒砂質シルト
2 10YR3/3 暗褐色細粒砂質シルト
3 2に第Ⅳ層40%含む

SZ03東側周溝
1 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂質シルト
2 10YR2/3 黒褐色細粒砂質シルト
3 10YR3/3 暗褐色細粒砂質シルト
4 3に第Ⅴ層5%含む

SZ04南側周溝
1 10YR2/2 黒褐色細粒砂質シルト
2 10YR4/4 褐色細粒砂質シルト

SZ05西側周溝
1 10YR2/1 黒色細粒砂質シルト
2 10YR3/3 暗褐色細粒砂質シルト 第Ⅳ層30%含む
3 10YR3/2 黒褐色細粒砂質シルト
4 10YR3/4 暗褐色細粒砂質シルト

基本層序
Ⅰ 現代造成土
Ⅲa 遺物包含層 10YR2/2 黒褐色細粒砂質シルト
Ⅲb 遺物包含層 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト
SK01
1 Hue10YR4/2 灰黄褐色細粒砂質シルト

SZ01西・南側周溝
1 10YR2/3 黒褐色粘土質シルト 第Ⅴ層30%含む
2 10YR3/3 暗褐色細粒砂質シルト
3 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト
4 3に第Ⅳ層30%含む
5 2に第Ⅴ層10%含む

第８図　方形周溝墓、周溝断面図（１／60）

第４節　遺物

弥生土器の編年については筆者の編年案〔岡田2012〕に基づいた。珠洲は吉岡康暢氏の分類〔吉岡1994〕に基づいた。近世陶磁器類については東京都新宿区内藤町遺跡の分類〔新宿区内藤町遺跡調査会1992〕に基づき、各陶磁器類の編年は、越中瀬戸については宮田進一氏〔宮田1998〕・村上裕也氏〔富山市教育委員会2009〕、伊万里・唐津については大橋康二氏〔大橋1989、九州近世陶磁学会〕、京焼系・信楽については能芝勉氏〔京都市埋蔵文化財研究所2004〕・畑中英二氏〔畑中2003・2007〕、瀬戸美濃については藤沢良祐氏〔瀬戸市史編纂委員会1998〕に基づいた。

縄文土器（第９図）　１は晩期、御経塚式の深鉢の口縁部である。２・３は晩期、長竹式の深鉢である。外面は条痕文を施す。２は２条の沈線文を施す。３は口縁部にキザミを施す。４は深鉢の底部である。

弥生土器（第９・10図）　いずれも弥生時代中期のものである。５は鉢である。時期はⅣ－２期である。６～８は壺である。時期はいずれもⅣ－２期である。６は卵胴型で短頸のものである。口縁部内面および外面は赤彩する。肩部には縦位の貼付がある。７は広口の短頸壺である。肩部と底部の外面はミガキを施す。８は壺の底部である。９～14は甕である。時期は、14がⅢ－１・２期でそれ以外はⅣ－２期である。９は口縁部内部に櫛描羽状文を部分的に施す。10は口縁端部を上方からの指圧による小波状口縁とする。11は口縁部内面に櫛描羽状文を施す。12は口唇面を形成する。13は小型のもので口縁部を折り返す。14は底部である。底面に編布圧痕がある。

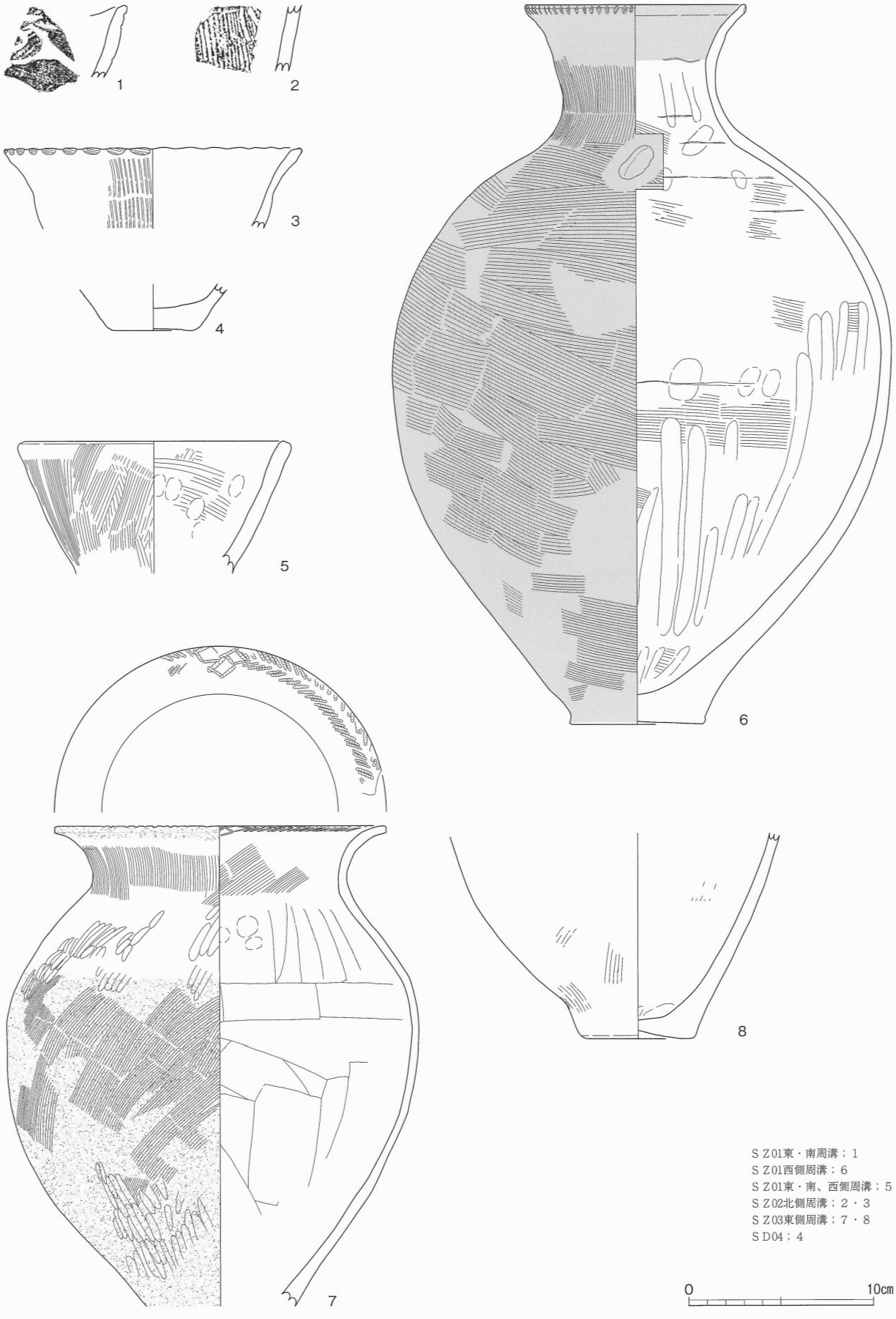
珠洲（第11図）　15～18は擂鉢である。15は口縁部である。16は体部である。17・18は底部である。17はオロシ目は６条以上ある。19は壺の胴部にかけてのものである。波状文を施す。20～23は壺・甕類の胴部である。

青磁（第11図）　24は龍泉窯系の皿である。口縁部は８弁で内面に陰刻文を施す

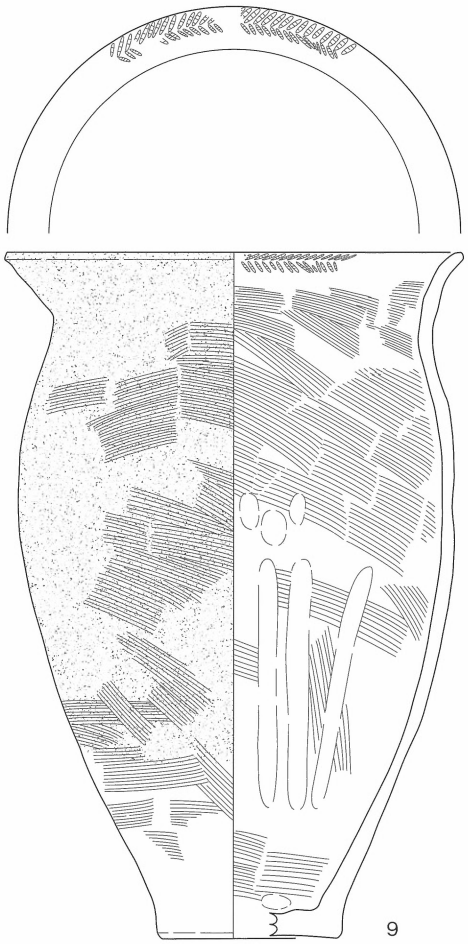
近世陶磁器類（第12～14図）　25は土師器皿である。見込みに梅鉢文を型押しする。26～50は越中瀬戸である。26～40はロクロ成形で素焼きの灯明皿である。底部は回転糸切りである。35は見込みに「霄過」と墨書する。38は見込みに「貞」と墨書する。41～45は施釉する極小皿から小皿である。46は餌猪口である。47・48は猪口である。49は土鍋蓋である。50は火入である。51・52は唐津である。51は擂鉢で、オロシ目幅は6.5cmに21条である。52は中椀で外面は鉄釉を網掛けする。53～57は伊万里である。53・54は中皿で内外面に呉須による染付を施す。55は辣韮形の小瓶である。56は端反形の小椀である。57は蓋物蓋である。58～60は瀬戸美濃である。58は甕形の中椀である。59は餌猪口である。底面に２文字の墨書がある。60は磁器の稜皿形の小皿である。見込みに型押文を施す。61・62は京焼である。61は小杯である。62は急須蓋である。63～65は信楽である。63・64は灯明皿である。65は卵形の中壺である。底面に墨書がある。66・67は産地不明の行平鍋と蓋である。出土位置が近いため同一セットのものと推測できる。68・69は七厘である。70は七厘のさなである。

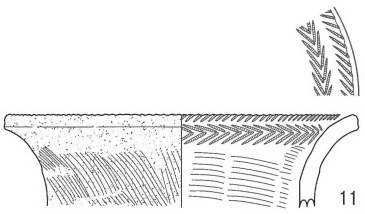
ミニチュア土器・土人形（第15図）　71は土鍋である。煮炊き痕がある。72は羽釜である。型打ち製法である。73・74は男性坐像である。いずれも型合わせ中空で、頭部は欠損する。73は最大高5.2cm、最大幅8.8cm、最大厚8.2cmを測る。表面にキラコ雲母が付着する。右手に笏穴、刀穴、背面に弓穴がある。74は最大高5.4cm、最大幅6.4cm、最大厚3.1cmを測る。椅子に腰掛けており、表面にキラコ雲母が付着する。背面に弓穴、箙穴がある。75は招き猫である。最大高9.5cm、最大幅7.3cm、最大厚3.2cmを測る。顔上部および背面は欠損する。

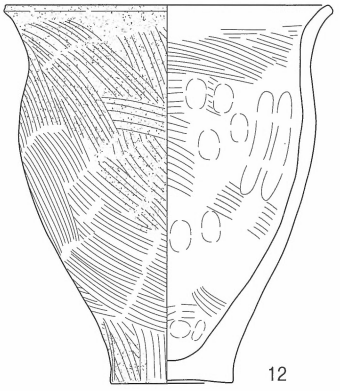
（岡田）

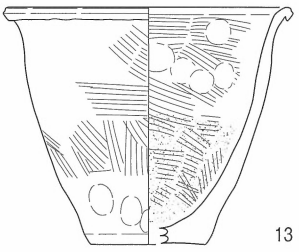


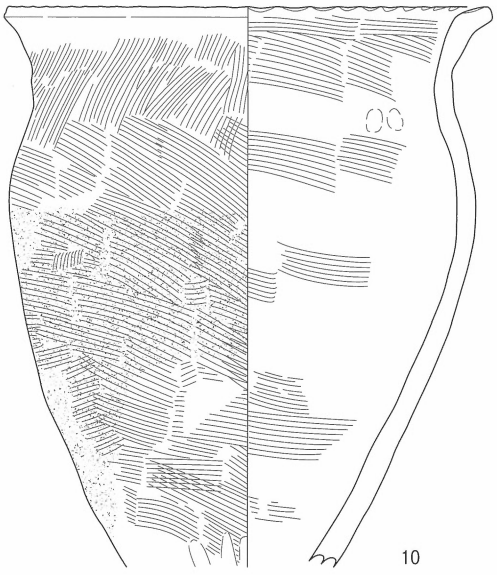
第９図　弥生土器〔１〕（Ｓ＝１／３）

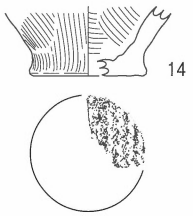








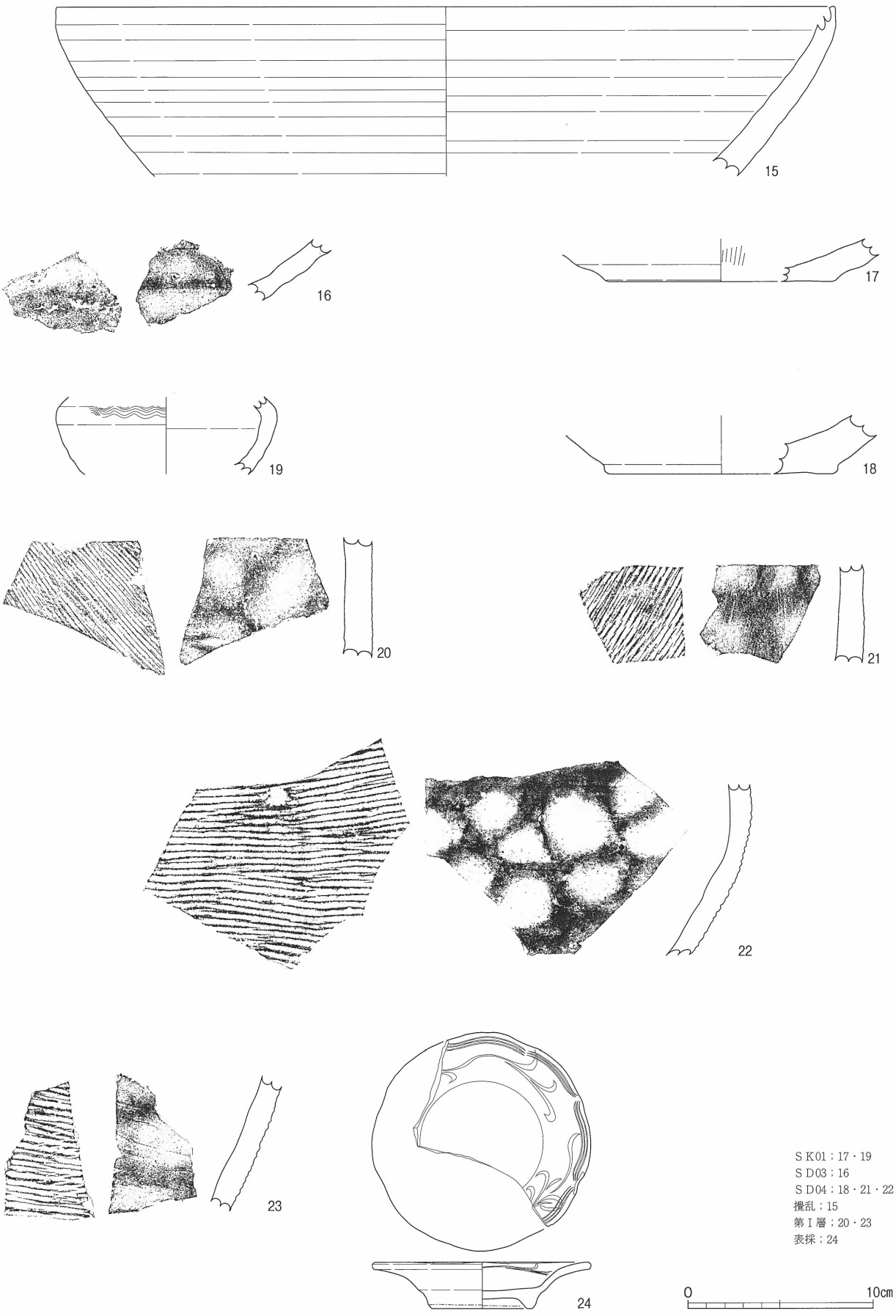




ＳＺ03東側周溝；９・11
ＳＺ05西側周溝；14
ＳＫ05；10・12
第Ⅲ層；13

0 10cm

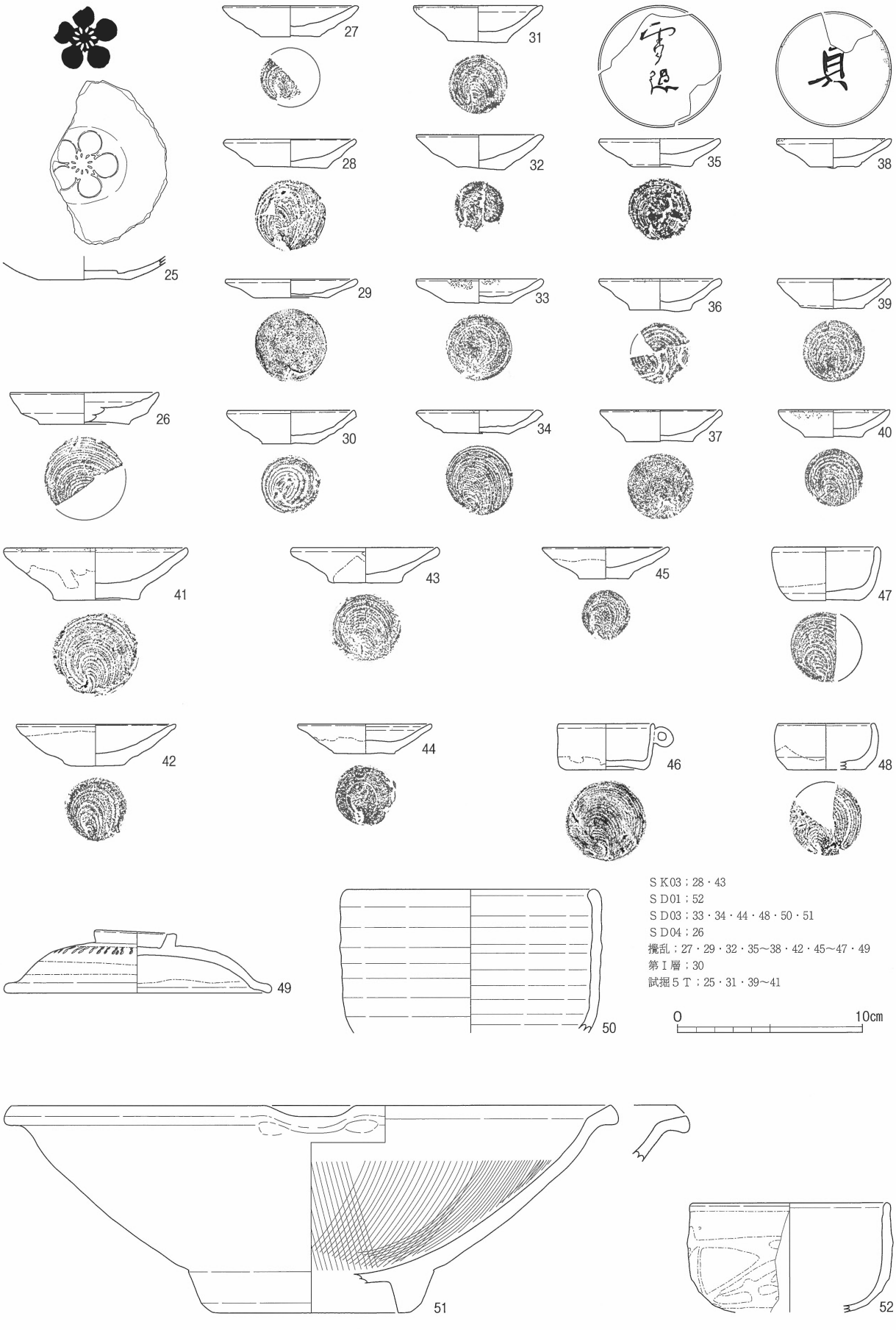
第10図　弥生土器〔２〕（Ｓ＝１／３）



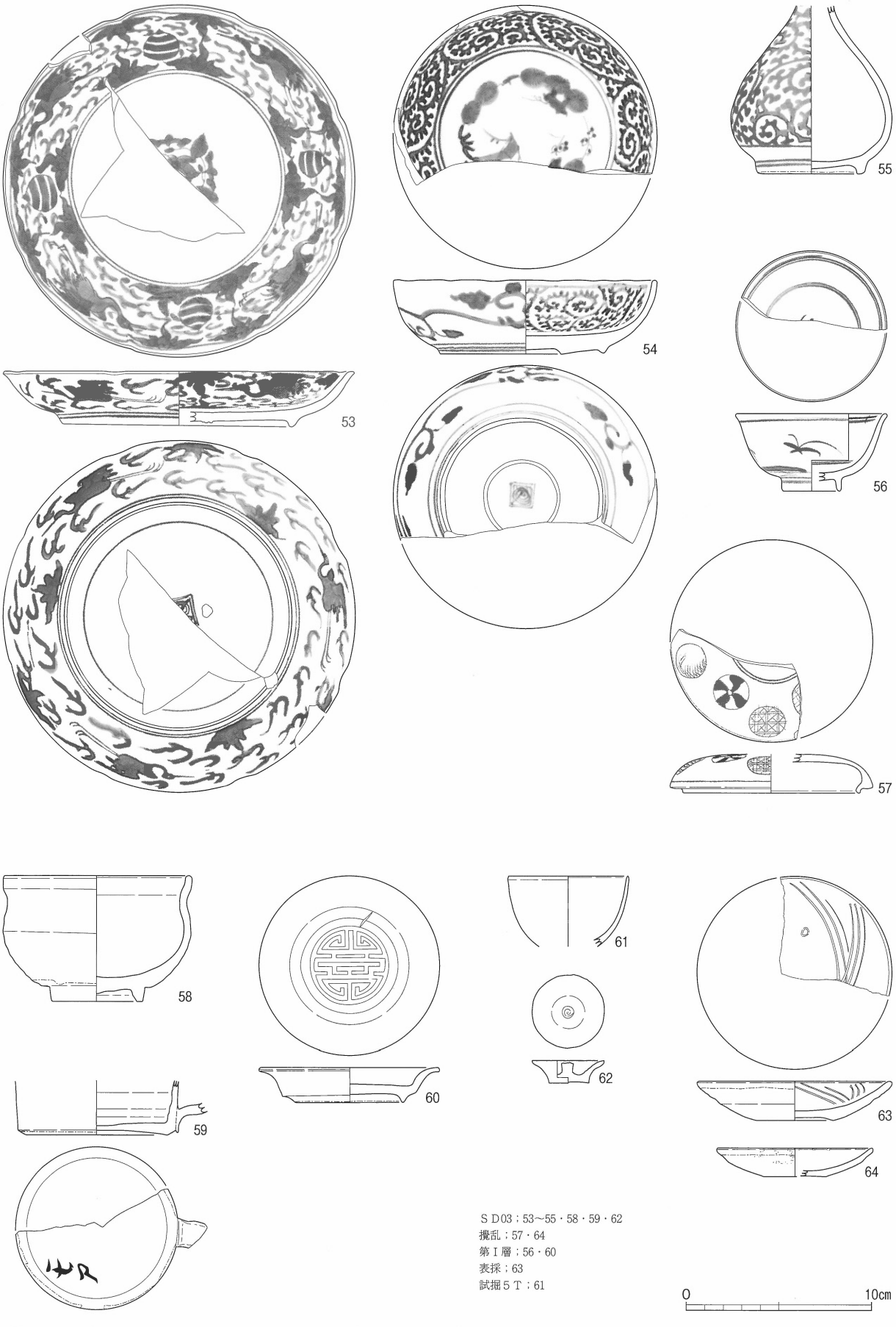
SK01：17・19
SD03：16
SD04：18・21・22
攪乱：15
第Ⅰ層：20・23
表採：24

0 10cm

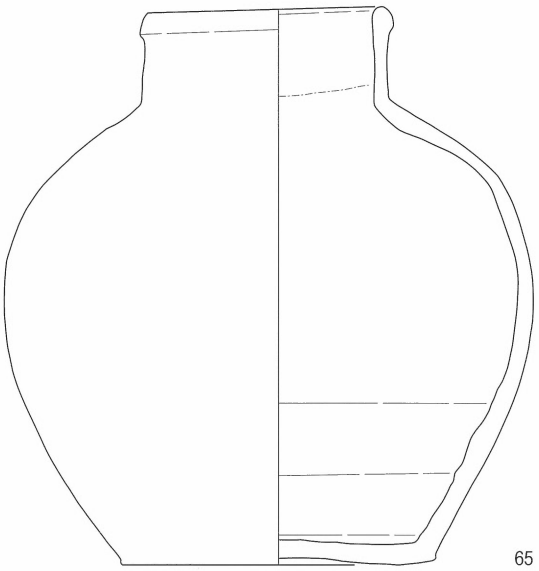
第11図　珠洲・青磁（S＝1／3）

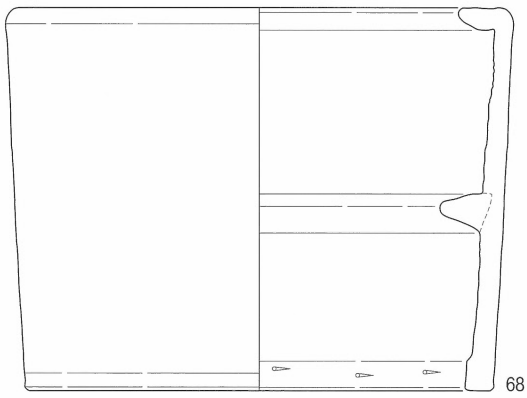


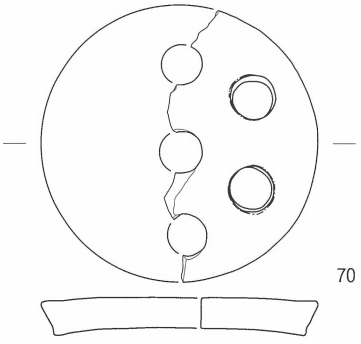
第12図　近世土師器・越中瀬戸・唐津（S＝1／3）

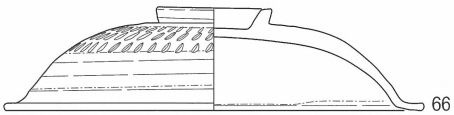


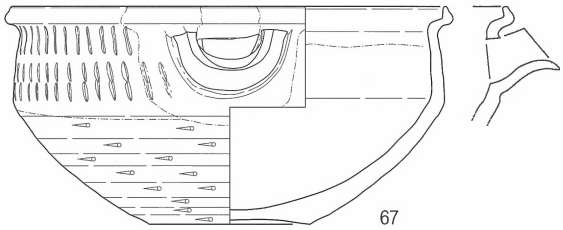
第13図　伊万里・瀬戸・京焼系・信楽（Ｓ＝１／３）



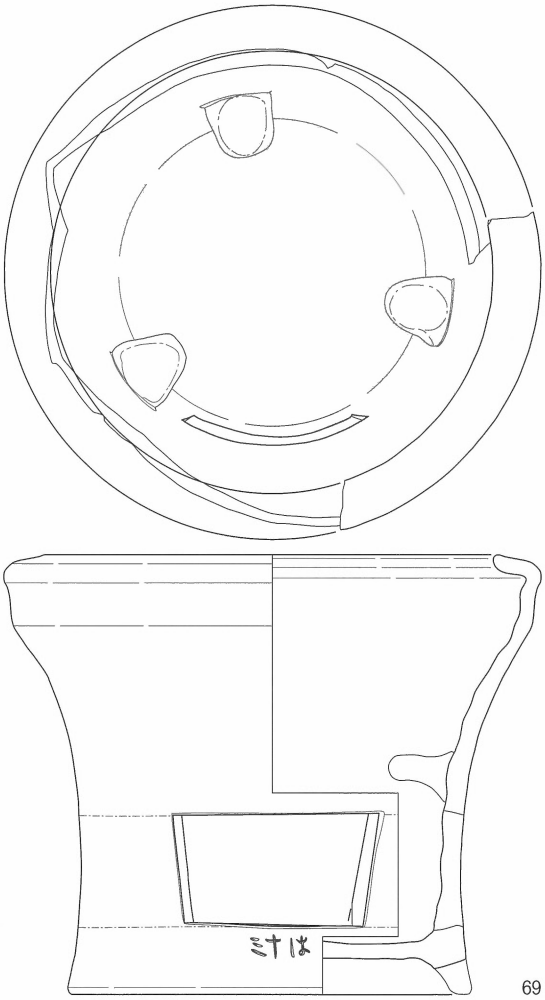




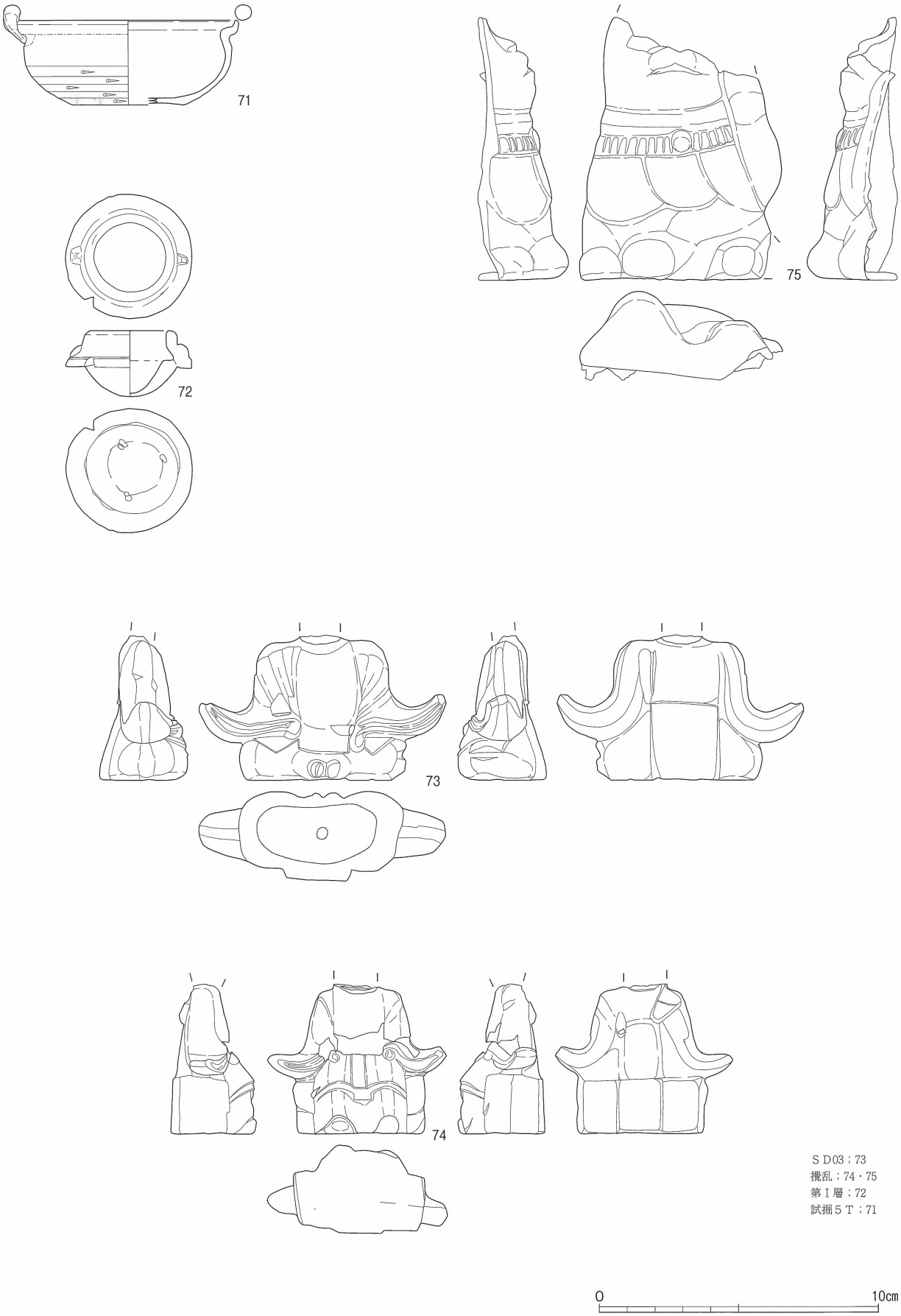




攪乱：66～68
試掘２Ｔ：65
試掘４Ｔ：69・70



第14図　信楽・その他・七厘（Ｓ＝１／３）



ＳＤ03：73
攪乱：74・75
第Ⅰ層：72
試掘５Ｔ：71

第15図　ミニチュア土器・土人形（Ｓ＝１／２）

番号	遺構名 グリッド	層位	種別	器種，器形	法量（cm）			胎土	焼成	色調	調整	残存率	備考
					口径	器高	底径						
1	ＳＺ01		縄文土器	深鉢	－	(3.9)	－	密	良	10YR7/2　にぶい黄橙色	ナデ	－	御経塚式。山形口縁。
2	ＳＺ02		縄文土器	深鉢	－	(3.6)	－	やや密	良	10YR4/4　褐色	条痕文	－	長竹式。沈線文。
3	ＳＺ02		縄文土器	深鉢	16.0	(4.3)	－	密	良	10YR5/3　にぶい黄褐色	条痕文	1.0/12	長竹式。口縁部キザミ。
4	ＳＤ04		縄文土器	深鉢	－	(2.5)	4.2	やや密	良	10YR4/6　褐色	ナデ	5.0/12	
5	ＳＺ01		弥生土器	鉢	14.0	(7.2)	－	密	良	10YR7/4　にぶい黄橙色	ハケメ	6.8/12	南・西側周溝出土。
6	ＳＺ01		弥生土器	壺	12.0	39.0	7.0	密	良	10YR7/4　にぶい黄橙色	ハケメ	2.0/12	西側周溝出土。外面・口縁部内面赤彩。
7	ＳＺ03		弥生土器	壺	18.0	(26.0)	－	密	良	10YR8/4　浅黄橙色	ハケメ	6.0/12	東側周溝出土。外面一部ミガキ。
8	ＳＺ03		弥生土器	壺	－	(11.2)	6.2	密	やや良	10YR6/6　明黄褐色	ハケメ	12.0/12	東側周溝出土。
9	ＳＺ03		弥生土器	甕	18.0	27.2	6.9	密	良	10YR7/4　にぶい黄橙色	ハケメ	11.5/12	東側周溝出土。口縁部に櫛描羽状文。
10	ＳＫ05		弥生土器	甕	19.0	(22.5)	－	密	良	10YR8/3　浅黄橙色	ハケメ	11.0/12	小波状口縁。
11	ＳＺ03		弥生土器	甕	13.6	(3.70)	－	密	良	7.5YR7/4　にぶい橙色	ハケメ	2.0/12	東側周溝出土。口縁部に櫛描羽状文。
12	ＳＫ05		弥生土器	甕	12.8	15.0	4.8	密	良	10YR7/3　にぶい黄橙色	ハケメ	11.0/12	
13		第Ⅲ層	弥生土器	甕	11.0	9.4	4.6	密	良	10YR6/3　にぶい黄橙色	ハケメ	2.0/12	口縁端部折り返す。
14	ＳＺ05		弥生土器	甕	－	(2.8)	4.4	密	良	10YR4/3　にぶい黄褐色	ハケメ	3.0/12	東側周溝出土。底部。底面に編布痕。
15	攪乱		珠洲	鉢	42.0	(9.2)	－	密	良	10G5/1　緑灰色	ロクロ	1.0/12	
16	ＳＤ03		珠洲	鉢	－	(3.3)	－	密	良	5BG5/1　青灰色	ロクロ	－	
17	ＳＫ01		珠洲	擂鉢	－	(2.3)	12.4	密	良	10YR7/1　灰白色	ロクロ	1.0/12	底部。オロシ目は６条以上。
18	ＳＤ04		珠洲	鉢	－	(3.2)	12.0	密	良	5BG6/1　青灰色	ロクロ	1.0/12	底部。
19	ＳＫ01		珠洲	壺	－	(4.2)	－	密	良	10BG6/1　青灰色	ロクロ	－	波状文。
20		第Ⅰ層	珠洲	壺・甕	－	(6.5)	－	密	良	5BG5/1　青灰色	タタキ	－	
21	ＳＤ04		珠洲	壺・甕	－	(5.3)	－	密	良	5BG6/1　青灰色	タタキ	－	
22	ＳＤ04		珠洲	壺・甕	－	(9.8)	－	密	良	5BG4/1　暗青灰色	タタキ	－	
23		第Ⅰ層	珠洲	壺・甕	－	(7.9)	－	密	良	5BG5/1　青灰色	タタキ	－	
24	表採		青磁	皿	11.4	2.6	5.8	密	良	10YR8/1　灰白色	ロクロ	5.0/12	青磁釉。
25	試掘５Ｔ		土師器	皿	－	(12.5)	5.0	密	良	10YR6/6　明黄褐色	ロクロ	6.0/12	梅鉢文型押し。
26	ＳＤ04		越中瀬戸	灯明皿	8.0	1.7	4.8	密	良	10YR5/8　黄褐色	ロクロ	5.0/12	
27	攪乱		越中瀬戸	灯明皿	7.0	1.7	3.2	密	良	10YR8/3　浅黄橙色	ロクロ	2.0/12	
28	ＳＫ03		越中瀬戸	灯明皿	6.9	1.6	3.9	密	良	10YR6/6　明黄褐色	ロクロ	11.0/12	
29	攪乱		越中瀬戸	灯明皿	7.0	1.0	4.0	密	良	10YR5/6　黄褐色	ロクロ	12.0/12	口縁部に油煙付着。
30		第Ⅰ層	越中瀬戸	灯明皿	6.8	1.8	2.8	密	良	10YR8/4　浅黄橙色	ロクロ	2.5/12	口縁部に油煙付着。
31	試掘５Ｔ		越中瀬戸	灯明皿	6.8	2.0	3.1	密	良	10YR8/3　浅黄橙色	ロクロ	6.0/12	口縁部に油煙付着。
32	攪乱		越中瀬戸	灯明皿	6.7	1.9	2.5	密	やや良	10YR8/2　灰白色	ロクロ	5.5/12	
33	ＳＤ03		越中瀬戸	灯明皿	6.7	1.3	3.5	密	良	7.5YR7/6　橙色	ロクロ	12.0/12	口縁部に油煙付着。
34	ＳＤ03		越中瀬戸	灯明皿	6.3	1.3	3.6	密	良	10YR8/3　浅黄橙色	ロクロ	12.0/12	口縁部に油煙付着。
35	攪乱		越中瀬戸	極小皿	6.4	1.5	3.3	密	良	10YR3/1　明黄橙色	ロクロ	6.1/12	墨書「膏過」。
36	攪乱		越中瀬戸	灯明皿	6.4	1.7	3.2	密	良	10YR8/3　浅黄橙色	ロクロ	9.0/12	口縁部に油煙付着。
37	攪乱		越中瀬戸	灯明皿	6.4	1.7	3.6	密	良	10YR7/3　にぶい黄橙色	ロクロ	6.5/12	口縁部に油煙付着。
38	攪乱		越中瀬戸	灯明皿	6.0	1.5	2.4	密	良	10YR7/4　にぶい黄橙色	ロクロ	10.0/12	墨書「貞」。口縁部に油煙付着。
39	試掘５Ｔ		越中瀬戸	灯明皿	5.9	1.7	3.4	密	良	10YR8/3　浅黄橙色	ロクロ	10.0/12	
40	試掘５Ｔ		越中瀬戸	灯明皿	5.9	1.5	3.1	密	良	10YR8/3　浅黄橙色	ロクロ	12.0/12	口縁部に油煙付着。
41	試掘５Ｔ		越中瀬戸	小皿	9.8	2.9	4.7	密	良	10YR8/3　浅黄橙色	ロクロ	12.0/12	錆釉。口縁部に油煙付着。
42	攪乱		越中瀬戸	小皿	8.5	2.3	3.5	密	良	10YR7/3　にぶい黄橙色	ロクロ	9.0/12	鉄釉。
43	ＳＫ03		越中瀬戸	小皿	7.8	1.9	4.0	密	良	10YR5/3　にぶい黄褐色	ロクロ	5.0/12	鉄釉。
44	ＳＤ03		越中瀬戸	極小皿	7.1	1.6	3.2	密	良	10YR8/4　浅黄橙色	ロクロ	12.0/12	鉄釉。
45	攪乱		越中瀬戸	極小皿	6.6	1.7	2.7	密	良	10YR8/3　浅黄橙色	ロクロ	12.0/12	鉄釉。
46	攪乱		越中瀬戸	餌猪口，半筒形	5.1	4.5	4.1	密	良	10YR3/2　黒褐色	ロクロ	12.0/12	鉄釉。
47	攪乱		越中瀬戸	猪口，半筒形	5.5	3.0	3.9	密	良	10YR6/4　にぶい黄橙色	ロクロ	5.0/12	鉄釉。
48	ＳＤ03		越中瀬戸	猪口，半筒形	5.1	2.5	4.3	密	良	10YR7/1　灰白色	ロクロ	5.3/12	鉄釉。
49	攪乱		越中瀬戸	土鍋蓋	14.1	3.4	－	密	良	10YR7/6　明黄褐色	ロクロ	12.0/12	錆釉、鉄釉。
50	ＳＤ03		越中瀬戸	火入，半筒形	13.3	(7.8)	－	密	良	7.5YR7/4　にぶい橙色	ロクロ	2.0/12	灰釉。
51	ＳＤ03		唐津	擂鉢，口縁折縁形	32.4	11.2	9.4	密	良	2.5YR6/8　橙色	ロクロ	7.0/12	錆釉。オロシ目幅6.5cmに21条。
52	ＳＤ01		唐津	中椀，腰張形	10.4	(5.9)	－	密	良	10YR5/1　褐灰色	ロクロ	3.0/12	内面飴釉、外面鉄釉綱がけ。
53	ＳＤ03		伊万里	中皿，丸形	19.0	3.0	12.3	密	良	10YR8/1　灰白色	ロクロ	12.0/12	透明釉。呉須染付。
54	ＳＤ03		伊万里	中皿，丸形	14.0	4.0	8.8	密	良	10YR8/1　灰白色	ロクロ	6.5/12	透明釉。呉須染付。
55	ＳＤ03		伊万里	小瓶，辣韮形	－	9.1	5.0	密	良	10YR8/1　灰白色	ロクロ	12.0/12	透明釉。呉須染付。離れ砂付着。
56		第Ⅰ層	伊万里	小椀，端反形	8.0	4.2	3.0	密	良	10YR8/1　灰白色	ロクロ	5.5/12	透明釉。呉須染付。
57	攪乱		伊万里	蓋物蓋	9.4	(2.1)	－	密	良	10YR8/1　灰白色	ロクロ	3.2/12	透明釉。呉須染付。
58	ＳＤ03		瀬戸美濃	中椀，腰形	9.9	6.8	4.7	密	良	10YR8/4　浅黄橙色	ロクロ	10.0/12	灰釉。
59	ＳＤ03		瀬戸美濃	餌猪口	－	(3.0)	7.6	密	良	10YR8/1　灰白色	ロクロ	7.0/12	灰釉。
60		第Ⅰ層	瀬戸美濃	小皿，稜皿形	9.4	1.9	5.7	密	良	10YR8/1　灰白色	ロクロ	9.0/12	透明釉。見込みに型押文。
61	試掘５Ｔ		京焼	小杯，丸形	6.5	(3.9)	－	やや密	良	10YR8/3　浅黄橙色	ロクロ	5.5/12	灰釉。
62	ＳＤ03		京焼	急須蓋	3.9	1.2	2.2	密	良	10YR6/4　にぶい黄橙色	ロクロ	12.0/12	錆釉。
63	表採		信楽	灯明皿	10.2	2.2	4.2	密	良	10YR8/1　灰白色	ロクロ	3.6/12	灰釉。
64	攪乱		信楽	灯明皿	8.3	1.6	3.4	密	良	10YR8/1　灰白色	ロクロ	2.0/12	灰釉。口縁部に油煙付着。
65	試掘２Ｔ		信楽	中壺，卵形	9.3	22.2	12.4	密	良	5Y8/1　灰白色	ロクロ	2.0/12	自然釉付着。
66	攪乱		その他	行平鍋蓋	16.4	4.1	4.5	密	良	10YR5/4　にぶい黄褐色	ロクロ	10.0/12	外面錆釉、内面鉄釉。
67	攪乱		その他	行平鍋	17.2	8.7	6.4	密	良	7.5YR6/6　橙色	ロクロ	4.9/12	外面錆釉、注口および内面に鉄釉。
68	攪乱		七厘	筒形	19.7	15.2	19.3	密	良	10YR8/3　浅黄橙色	ロクロ	3.0/12	
69	試掘４Ｔ		七厘	箱口形	21.2	17.4	15.7	密	良	10YR8/3　浅黄橙色	ロクロ	2.0/12	外面錆釉。風口下部に「三十は」刻書。
70	試掘４Ｔ		七厘部品	さな，円盤形				密	良	10YR8/3　浅黄橙色	ナデ	5.7/12	
71	試掘５Ｔ		ミニチュア	土鍋，丸形無足	7.8	3.6	3.9	密	良	10YR8/3　浅黄橙色	ロクロ	1.0/12	灰釉。外面にスス・煮こぼれ痕。
72		第Ⅰ層	ミニチュア	羽釜	2.8	2.5	－	密	良	10YR8/3　浅黄橙色	型押し	12.0/12	丸底。

第１表　土器類観察表

第Ⅳ章　総括

第１節　弥生時代中期

今回の調査では弥生時代中期の方形周溝墓を５基検出した。出土土器は畿内第Ⅳ様式併行の越中Ⅳ－２期〔岡田2012〕の範囲に収まり、この周溝墓群は短期間に一括して造営されたものと推測する。

富山県下における弥生時代中期の方形周溝墓は、石塚遺跡を中心とした佐野台地状や放生津潟周辺の高島Ａ遺跡等、県西部を中心に検出されており、富山市域では初の検出である。ＳＺ01～03は北西側隅が１箇所切れるタイプで特徴的である。これは調査区の南側は旧河道が確認されていることから地形的に低くなっており、調査区北側が小高くなっていることから、北西隅の周溝が切れるのは墓道を意識している可能性がある。富山県下では27基の中期の方形周溝墓がある。県下の方形周溝墓の規模は、長軸が①４～８ｍ、②11ｍ以上に分類できる。ＳＺ01・02は長軸９ｍ台とこの中間に入る。ＳＺ03は①の範疇にある。一方短軸は①11ｍ以上、②６ｍ前後、③４ｍ以下に分類でき、高岡市石名瀬Ａ遺跡ＳＺ303のように長軸が11.1ｍであっても短軸は６ｍ台とするなど、長軸が６ｍ以上ものは短軸を６ｍ前後とするものが多い。ＳＺ01・02も短軸はこの６ｍ前後となり、短軸は標準的である。

調査区南西側で出土した埋没樹木群は現地表面から６ｍ下で検出され、樹種はコナラ属、放射性炭素年代では2,250±20、calBC384－calBC235の年代が与えられた〔富山市教育委員会2015〕。八日市地方遺跡の土器群の付着物から放射性炭素年代測定が実施されており〔小林他2009〕、この土器群での年代測定結果から当遺跡を比較検討してみる。検出された樹木の年代は、紀元前３世紀の中頃から後半にかけてで、八日市地方６・７期〔福海2003〕に相当する。今回の調査では底部に編布圧痕がある14の年代に相当する。一方、方形周溝墓の土器年代では八日市地方10期で紀元前２世紀後半に比定される。このことは、調査区南側にあった河川が洪水等で埋まり広い平地が拡がり安定した結果、人々の生活が営まれたと推測する。また、埋没樹木はコナラ属であることから、弥生時代中期の木製品の素材として好まれており、こうした樹林があることも要因となるだろう。弥生時代中期の様相として墓域に近接して居住区があることから〔岡田2005〕、当調査区周辺に居住域の存在が推測できる。

第２節　中世

中世の遺構としてはＳＤ04～07がある。東西方向のＳＤ04・06・07とＳＤ04西端検出部から南側へ直交延長線上にＳＤ05があり、位置関係から区画溝であると推測する。遺物としては、15が珠洲の擂鉢で吉岡編年のⅡ～Ⅲ期で鎌倉時代、24が龍泉窯の青磁で15世紀前半にそれぞれ比定できる。当遺跡周辺は鎌倉時代から室町時代にかけて大田保に比定されており、これに伴う区画溝の可能性がある。

第３節　近世

近世の遺構として土坑・溝を検出した。万治４（1661）年に幕府より富山城改築の許しを得てから本格的に城下町の整備を開始し、当調査区周辺も、『万治年間年間富山旧市街図』、『御調理富山絵図』（寛文６年）、『越中富山御城下絵図』（安政元年）等の古絵図に記録されている。これらの絵図に記載されている当調査区周辺の家臣団は高知組であり、藩政でも重要な位置である。『越中富山城下絵図』および『安政２年富山御家中分限帳』で比較すると当調査区は「古市縫殿右衛門」「安達

調太郎」「野村平内」の各屋敷に相当する。絵図と調査区を合成すると、安達調太郎屋敷地と野村平内屋敷地境にＳＤ03が位置し、この水路が屋敷境となる可能性が高い。それ以前の絵地図でもおおよそＳＤ03を境としていることから城下町整備時より区画溝として存在している可能性がある。

当調査区周辺には千石御蔵が設置されるなど富山城下町でも重要な地点である。本調査区では標高約11.0mと富山城下町でも小高く、洪水層も今回は確認できなかったことから、地形的な理由が推定できる。このことは、幕末に有力家臣の下屋敷が設けられる理由の一つであろう。

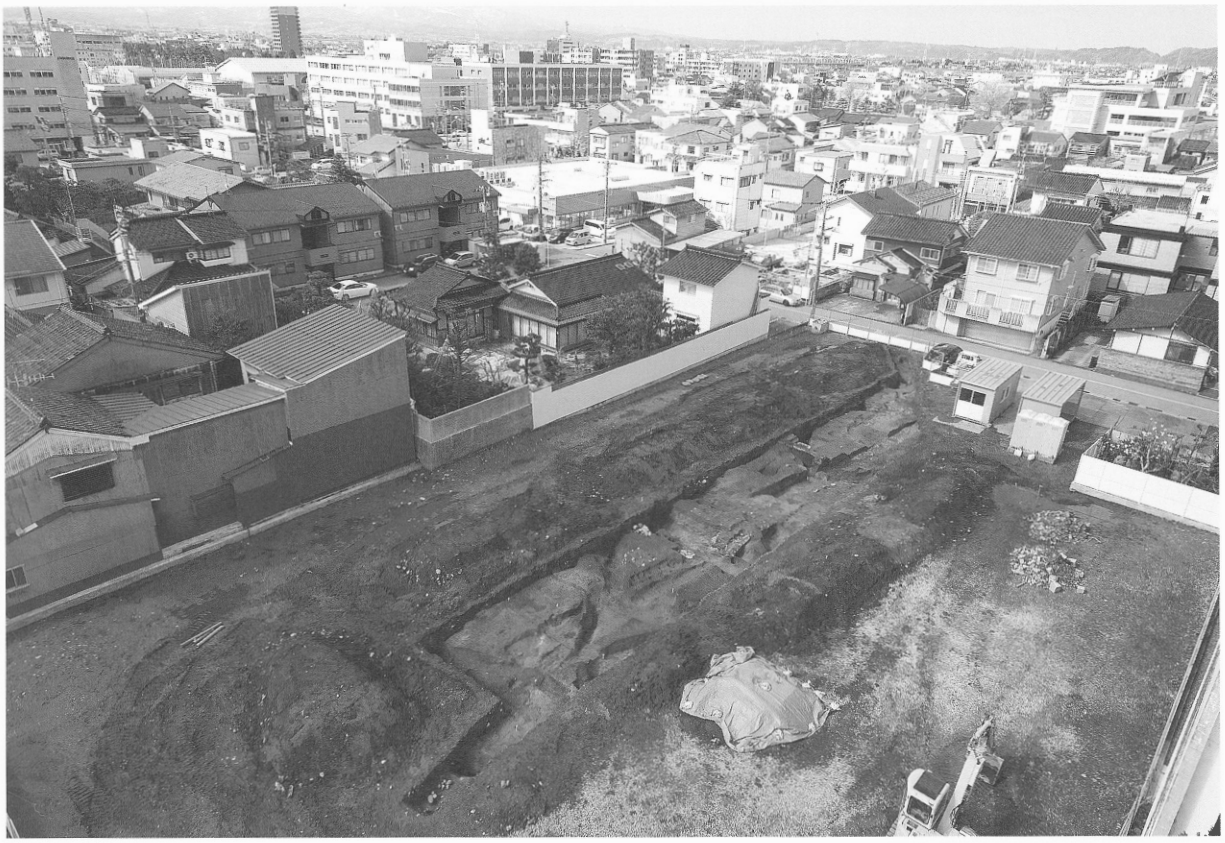
今回の調査からは、富山藩における有力家臣の屋敷跡の遺構が残存していることが判明した。今後周辺の調査が進めば、暮らしぶり等も明らかとなるだろう。（岡田）

1．万治年間富山旧市街図（～寛文３年、富山県立図書館蔵）　2．御調理富山絵図（寛文６年、富山県立図書館蔵）　4．越中富山御城下絵図（安政元年、富山県立図書館蔵）　5．富山市都市計画図（現在）

第16図　当調査区周辺の江戸時代の古絵図による変遷（Ｓ＝１／10,000）

参考文献

大橋康二　1989　『肥前陶磁』　ニュー・サイエンス社
岡田一広　2005　「富山平野における弥生墓制」『季刊考古学』第92号　雄山閣
岡田一広　2012　「越中西部における弥生時代前半期の土器について」『大境』第31号　富山考古学会
鹿島昌也　2011　「富山市総曲輪遺跡出土の墨書土器「宅持」について」『大境』第30号　富山考古学会
鹿島昌也　2013　「「中世富山城推定地」から「千石町遺跡」へ」『富山市の遺跡物語』№14　富山市教育委員会埋蔵文化財センター
九州近世陶磁学会　2000　『九州陶磁の編年』
國香正稔　1995　「富山市内の微地形調査」『巡検研究』第３号　富山巡検研究会
公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2004　『平安京左京北辺四坊』
小林謙一・福海貴子・坂本稔・工藤雄一郎・山本直人　2009「北陸地方石川県における縄文晩期から弥生移行期の炭素14年代測定研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第150集　国立歴史民俗博物館
瀬戸市史編纂委員会　1998　『瀬戸市史　陶磁史篇六』
高瀬保編　1987　「富山藩侍帳」『越中資料集成』１　桂書房
富山市　1987　『富山市史　通史上巻』
富山市　1987　『富山市史　通史下巻』
富山市教育委員会　2004　『富山城跡試掘確認調査報告書』
富山市教育委員会　2005　『富山城跡発掘調査概要』
富山市教育委員会　2006　『富山城跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会　2009　『富山城跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会　2010　『富山城跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会　2012　『富山城跡発掘調査報告書』
富山市教区委員会・西町南地区市街地再開発組合　2014　『富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書』
富山市教育委員会　2015　『富山市内遺跡発掘調査報告書XV』
富山市教育委員会埋蔵文化財センター　2011　『富山市の遺跡物語』所報№12
富山市教育委員会・富山市上下水道局　2012　『富山城跡発掘調査報告書』
富山市郷土博物館　2011　『特別展　街道を歩く―近世富山町と北陸道―』
畑中英二　2003　『信楽焼の考古学的研究』　サンライズ出版
畑中英二　2007　『続・信楽焼の考古学的研究』　サンライズ出版
林寺厳州　1992　「富山城採集遺物について」『富山市考古資料館報』№23　富山市考古資料館
福海貴子　2003　「第１節　八日市地方遺跡出土土器の検討」『八日市地方遺跡Ⅰ』　小松市教育委員会
古川知明　2014　『富山城の縄張と城下町の構造』　桂書房
宮田進一　1998　「越中瀬戸の成立と展開」『情報と物流の日本史』　地方史研究協議会
吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』　吉川弘文館



全景（北東から）

方形周溝墓ＳＺ01・02全景（北東から）

縄文土器・弥生土器・珠洲・青磁（縮尺１／３、集合写真は任意）

報告書抄録

ふりがな	せんごくまちいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	千石町発掘調査報告書
副書名	千石町四丁目地内宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	78
編著者名	近藤顕子（編）、岡田一広（編）
編集機関	株式会社エイ・テック
編集機関所在地	〒939-1119　富山県高岡市オフィスパーク12番地　TEL 0766-62-0388
発行機関	富山市教育委員会埋蔵文化財センター
発行機関所在地	〒930-0091　富山県富山市愛宕町１－２－24
発行年月日	西暦2015年９月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
千石町遺跡（せんごくまちいせき）	富山市（とやまし） 千石町（せんごくまち）	16201	2010444	36度 41分 6秒	137度 12分 33秒	20150304 〜 20130403	281.7	民間宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
千石町遺跡（せんごくまちいせき）	集落跡	縄文晩期		縄文土器	
		弥生時代	方形周溝墓	弥生土器	方形周溝墓５基を検出
		中世	溝	珠洲、青磁	
		近世	土坑、溝	近世土師器、越中瀬戸、唐津、伊万里 瀬戸美濃、京焼系、信楽、近世不明陶器 七厘、ミニチュア、土人形	富山藩高知組屋敷に伴う遺構を検出

要約

本調査区は富山城下町の南東側で標高約11.0ｍの小高い場所に位置する。弥生時代中期には５基の方形周溝墓が構築された。弥生土器はいずれも周溝より出土しており、供献されたものと推定できる。遺構の時期は畿内代Ⅳ様式併行の越中Ⅳ－２期（八日市地方10期）に比定でき、土器の時期差は確認できないため短期間に一括して造営されたものと推測する。ＳＺ01・02は、県下の方形周溝墓と比較して長軸は空白であった９ｍ台である一方、短軸は６ｍ前後と長軸６ｍ以上の方形周溝墓としては標準的な大きさである。ＳＺ03は長軸６ｍ台で標準的な大きさである。

中世では溝が４条確認し、平行あるいは直交することから区画溝と推測した。当調査区周辺は大田保の比定地であり関連する遺構と推測する。

江戸時代は絵図との比較から、有力な家臣である高知組の武家屋敷地に該当する。溝ＳＤ03は武家屋敷境の区画溝と推測できる。

富山市埋蔵文化財調査報告78

千石町遺跡（せんごくまちいせき）発掘調査報告書

― 千石町四丁目地内宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査 ―

発行日　2015（平成27）年９月30日
編　集　株式会社エイ・テック
〒939-1119　富山県高岡市オフィスパーク12番地
発　行　富山市教育委員会埋蔵文化財センター
〒930-0091　富山県富山市愛宕町１－２－24
TEL 076-442-4246　FAX 076-442-5810
E-mail:maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp
印　刷　中村印刷工業株式会社